

書いて覚える

俳句の形

縦書き版

凡
茶



《はじめに》

俳句を始めて間もない頃、佳句を生み出せそうな景を目にしても、それをうまく五七五で表現することができず、結局は駄句を詠んでしまうということが多々ありました。

ある日、タンポポが一面に咲く野原で、小さな子供がお父さんをやってつげようと懸命に相撲を取っている様子を見かけました。微笑ましい景に出くわしたと思いい、早速一句ひねってはみたのですが、納得のいく作品とはならず、当時使っていた俳句手帳に書き留めた句を、句会などで披露することもなくそのまま眠らせてしまいました。いわゆる「お蔵入り」です。次がその時の一句です。

たんぽぽの野で親子相撲白熱し

後年、俳句手帳をめくり直している時にこの句を見つけ、次のような作品に改めてみました。

たんぽぽや父へ飛び込むちび力士 凡茶

本テキストの①（6〜11p）で紹介する、上五の名詞に「や」をつけて切り、句末は名詞で結ぶ、俳句ならではの形を身につけてから詠み直したことで、筆者のお気に入りの句の一つとなりました。

俳句には、この形のほかに、時には弾むように、時には流れるように、時には染みるように心地よく耳に響く、聞き心地の良い形のようなものがいくつか存在します。本テキストは、そのような俳句の形の代表的なものを、古今の名句を書き覚えて覚えながら身につけていただくことを目的としています。

自宅にプリンターのある方は、必要な箇所を何度か印刷して、繰り返し名句を書き出すトレーニングを積んでいただけだと考えています。自宅にプリンターの無い方は、ノートなどを用意して、本テキストで紹介する名句を書き出していただきたいと思えます。その際、俳句の持つ美しい形を楽しみながら、味わいながら書くことを忘れないで下さい。

なお、本テキストは、俳句の形の代表的なものを使いこなせるようになっていただくために書き上げたのですが、読者の皆様を型にはめようとする意図は全くございません。あくまで、基本的な形を覚えていただくことが目的であり、ここで紹介する形だけが名句を生産するための雛型という訳ではありません。実際、歳時記などをめくってもらえれば、ここで紹介した形とは異なるスタイルの名句がわんさか出てくるはず。読者の皆様には、**佳句を生み出しやすい形を吸収しつつ、型を破る自由さともに育んでいただければ幸いです。**

※ 本テキストにおける難読漢字の振り仮名は、口語的仮名遣いで統一しました。

※ 例句は可能な限り原句のまま掲載しましたが、「哉」を「かな」と表記するなど、暗誦を促すための必要最小限の置き換えを行いました。

※ 一部の旧字体についてはデジタル表示上の制約から、原句と異なる新字体で表記しています。

(例) 「蟬」↓「蟬」

《目次》

| | |
|---|----|
| はじめに | 2 |
| 目次 | 4 |
| 第一章 「や」の形 | 6 |
| ① 上五の名詞に「や」をつけて切り、句末は名詞で結ぶ | 6 |
| ◎ ワンポイント・アドバイス：「つきすぎ」と「はなれすぎ」 | 12 |
| ② 上五の動詞の終止形・連体形に「や」をつけて切り、句末は名詞で結ぶ | 13 |
| ③ 上五の名詞に「や」をつけて切り、句末は活用語の終止形で結ぶ | 16 |
| ④ 上五の名詞に「や」をつけて切り、句末は連用形や連用修飾語で流す | 20 |
| ⑤ 中七の後ろを「や」で切り、句末は名詞で結ぶ | 23 |
| 第二章 「かな」の形 | 27 |
| ⑥ 座五の名詞に「かな」をつけ、句末で切る | 27 |
| ⑦ 中七の連体形の後ろに意味上の切れを入れ、座五の名詞につけた「かな」で句末を切る | 32 |
| ⑧ 座五の活用語の連体形に「かな」をつけ、句末で切る | 35 |
| ⑨ 上五の名詞で一旦切り、活用語の連体形につけた「かな」で句末を結ぶ | 38 |
| ◎ ワンポイント・アドバイス：「や・かな」について | 41 |
| 第三章 「けり」の形 | 42 |
| ⑩ 座五の活用語の連用形に「けり」をつけ、句末で切る | 42 |
| ⑪ 上五の名詞で一旦切り、座五の「けり」でも句末を切る | 48 |
| ⑫ 中七の後ろを「けり」で切り、座五に名詞を据える | 51 |
| ◎ ワンポイント・アドバイス：「や・けり」について | 54 |
| 特別章 三大切字以外の切字を使いこなそう | 55 |
| ● 「なり」を使いこなそう | 56 |
| ● 「り・たり・をり」を使いこなそう | 63 |
| ● その他のよく用いる切字① 助詞編 | 69 |
| ● その他のよく用いる切字② 助動詞編 | 75 |

| | | |
|------|----------------------------------|-----|
| 第四章 | 名詞で切る形 | 81 |
| ⑬ | 名詞で上五の後ろを切り、句末は活用語の終止形で結ぶ | 81 |
| ⑭ | 名詞で上五の後ろを切り、句末は連用形や連用修飾語で流す | 88 |
| ◎ | ワンポイント・アドバイス：上五の後ろも句末も名詞で切る形について | 89 |
| ⑮ | 名詞で中七の後ろを切り、句末にも名詞を据える | 94 |
| ⑯ | 座五の名詞で句末を切る | 99 |
| 第五章 | 形容詞・動詞で切る形 | 100 |
| ⑰ | 形容詞の終止形で中七の後ろを切り、座五に名詞を据える | 104 |
| ⑱ | 形容詞の終止形で句末を切る | 107 |
| ⑲ | 動詞の終止形で句末を切る | 112 |
| ⑳ | 倒置法を用い、動詞の終止形で上五の後ろを切る | 115 |
| 第六章 | 連体形や連用形で終わる形 | 116 |
| ㉑ | 連体形で終わる | 116 |
| ㉒ | 一句を切ることなく連用形で終わる | 119 |
| 第七章 | 定型を意識しつつ型を破る | 124 |
| ㉓ | 中七の途中で切る | 124 |
| ㉔ | 中七の途中で切って、くりかえす部分を作る | 129 |
| ㉕ | 句またがり | 132 |
| おわりに | | 134 |

第一章 「や」の形

俳句の切字のうち、詠嘆の意が特に強く込められる「や」「かな」「けり」の三語は、切字の代表格と言ってよいでしょう。ここでは、その三語の中でも、特に頻繁に用いられる「や」を使った俳句の形を学んでいきます。

① 上五の名詞に「や」をつけて切り、句末は名詞で結ぶ

名詞十「や」
新じやがや野風の先の田舎富士

凡茶

俳句の基本中の基本と言える形です。松尾芭蕉が『おくのほそ道』の道中で詠んだ次の二つの名句もこの形をしています。

夏草や兵共がゆめの跡 芭蕉 『おくのほそ道』所収
つわものども

荒海や佐渡によこたふ天河 芭蕉 『おくのほそ道』所収
あまのがわ

聴き心地がよく安定感があり、筆者も頻繁に用いる形です。

筍や総理に似たる鄙の人 凡茶
たけのこ ひな

卒業や丈の揃はぬ色鉛筆 凡茶

やどかりや怪雲壊れただの雲 凡茶

新じやがや野風の先の田舎富士 凡茶

切字の直前の語は一句の中核となります。よって、芭蕉の夏草の句や、筆者の四句のように、「や」のつく上五の名詞としては、季語がよく選ばれます。

以下、上五の名詞の季語に「や」のついた名句を紹介しますので、是非とも暗誦してください。かなり例句が多いですが、この形は最重要の形になりますから、徹底的に慣れておく必要があります。

菊の香やならには古き仏達 芭蕉 『笈日記』所収

さみだれや大河を前に家二軒 蕪村 『蕪村句集』所収

すゞしさや鐘を離る、鐘の声 蕪村 『蕪村句集』所収

ゆく春やおもたき琵琶の抱心だきこころ 蕪村 『五車反古』所収

螢火や山のやうなる百姓家 富安風生 『草の花』所収

秋風や模様がちがふ皿二つ 原石鼎 『花影』所収

湯豆腐やいのちのはてのうすあかり 久保田万太郎 『流寓抄以後』所収

木がらしや目刺にのこる海のいろ 芥川龍之介 『澄江堂句集』所収

啄木鳥きつつきや落葉をいそぐ牧の木々 水原秋櫻子 『葛飾』所収

新涼や白きてのひらあしのうら 川端茅舎 『川端茅舎句集』所収

三月やモナリザを売る石畳 秋元不死男 『万座』所収

寒雷はりやびりりびりりと真夜の玻璃 加藤楸邨 『寒雷』所収

ところで、前出の芭蕉の「荒海やく」の句のように、季語以外の名詞に「や」をつけて切る場合は、その語が季語以上に一句全体のイメージを左右する重要な語になっている必要があります。なんでもかんでも名詞に「や」をつけられよというものではありません。

次の例句を読んで実感してください。

古池や蛙かわずとび飛こむ水のおと 芭蕉 『蛙合』所収

閑しずかさや岩にしみ入いる蟬の声 芭蕉 『おくのほそ道』所収

煎じ茶や人待つ宿の雪女 儀久 『大歳時記』所収

中年や遠くみのれる夜の桃 西東三鬼 『夜の桃』所収

暗誦

俳句上達のコツは優れた句を覚え、その形を使いこなせるようにすることです。前出の名句を、季語と作者を手掛かりに書き出してみましよう。思い出せない場合は、前に戻り読みなおして下さい。

◎季語に「や」

(ア) 季語 夏草 作者 芭蕉

や

(イ) 季語 菊 作者 芭蕉

や

(ウ) 季語 さみだれ 作者 蕪村

や

(エ) 季語 すずし 作者 蕪村

や

(オ) 季語 ゆく春 作者 蕪村

や

(カ) 季語 螢火 作者 富安風生

や

(キ) 季語 秋風 作者 原石鼎

や

(ク) 季語 湯豆腐 作者 久保田万太郎

や

(ケ) 季語 木がらし 作者 芥川龍之介

や

(コ) 季語 啄木鳥 作者 水原秋櫻子

や

(サ) 季語 新涼 作者 川端茅舎

や

(シ) 季語 三月 作者 秋元不死男

や

(ス) 季語 寒雷 作者 加藤楸邨

や

◎季語以外の語に「や」

(セ) 季語 天河 作者 芭蕉

や

(ソ) 季語 蛙 作者 芭蕉

や

(夕) 季語 蟬 作者 芭蕉

や

(チ) 季語 雪女 作者 儀久

や

(ツ) 季語 桃 作者 西東三鬼

や

暗誦 解答

◎季語に「や」

- (ア) 夏草や兵共がゆめの跡 (芭蕉)
 - (イ) 菊の香やならには古き仏達 (芭蕉)
 - (ウ) さみだれや大河を前に家二軒 (蕪村)
 - (エ) すゞしさや鐘を離るゝ鐘の声 (蕪村)
 - (オ) ゆく春やおもたき琵琶の抱心 (蕪村)
 - (カ) 螢火や山のやうなる百姓家 (富安風生)
 - (キ) 秋風や模様のちがふ皿二つ (原石鼎)
 - (ク) 湯豆腐やいのちのはてのうすあかり (久保田万太郎)
 - (ケ) 木がらしや目刺にのこる海のいろ (芥川龍之介)
 - (コ) 啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々 (水原秋櫻子)
 - (サ) 新涼や白きてのひらあしのうら (川端茅舎)
 - (シ) 三月やモナリザを売る石畳 (秋元不死男)
 - (ス) 寒雷やびりりびりりと真夜の玻璃 (加藤楸邨)
- ◎季語以外の語に「や」
- (セ) 荒海や佐渡によこたふ天河 (芭蕉)
 - (ソ) 古池や蛙飛こむ水のおと (芭蕉)
 - (タ) 閑さや岩にしみ入蟬の声 (芭蕉)
 - (チ) 煎じ茶や人待つ宿の雪女 (儀久)
 - (ツ) 中年や遠くみのれる夜の桃 (西東三鬼)

練習

上五の名詞に「や」をつけて切り、句末は名詞で結ぶ形の俳句を、後述の情景に実際に臨んでいる気分になって詠んで下さい。

【注】解答例の句は、凡茶（筆者）が既に発表したものです。よって、ここで読者様が詠んだ句を、自分の句として句会、結社誌等で発表したり、俳句賞の公募に応募したりすること
はしないで下さい。

情景1

冬になってだいぶ経ち、いよいよ日が短くなってきた。町中も随分せわしない様子だ。ふと見ると、ラーメン屋の電光看板が壊れており、ラの字だけ灯らず「メン」になっている。

や

情景2

バラ園にやって来た。赤、白、黄、色鮮やかで気品のある花々が、高貴な香りを発している。しばらく園内を回っていると、隅の目立たぬ場所にネズミ取りが置いてあった。見ると、小さいネズミが一匹捕まって縮こまっている。

や

練習 解答例

情景1 短日やラの字灯らぬラーメン屋（凡茶）

情景2 薔薇園やちびを捕らへし鼠取り（凡茶）

◎ ワンポイント・アドバイス：「つきすぎ」と「はなれすぎ」

上五の名詞に「や」をつけて切り、句末は名詞で結ぶ形の俳句を作るとき、上五（切れる前）と、中七・座五（切れた後）の取り合わせが、「つきすぎ」や「はなれすぎ」にならないように注意してください。

つきすぎ（即き過ぎ）とは、季語と別の言葉との取り合わせが、誰でも思いつきそうな在り来たりなものであるという意味です。例えば、次の俳句はつきすぎです。

台風や昨夜よべの名残なごりの川かみの嵩かさ

この句は、大雨をもたらす「台風」という季語と、「川の嵩」の取り合わせが当たり前すぎるので、次のように改めます。

蜉蝣かげろうや昨夜よべの名残なごりの川かみの嵩かさ 凡茶

はなれすぎ（離れ過ぎ）とは、季語と取り合わせた言葉の間の距離感が大きすぎて響き合うところが全くなく、趣きを感じられないという意味です。次の俳句が離れすぎの典型です。

元旦や文字の小さき置手紙

この句、「元旦」という淑気で満たされた一年のうちで最も特別な時間を示す季語と、「文字の小さき置手紙」という室内のささやかなものの隔たりが大き過ぎるような気がします。そこで、季語をひぐらしの鳴き声に改めてみます。

かなかなや文字の小さき置手紙 凡茶

この形の俳句に限らず、季語と別の言葉とを取り合わせる俳句を詠む場合は、常に「つきすぎ」や「はなれすぎ」にならないように心がける必要があります。参考に見てみてください。

② 上五の動詞の終止形・連体形に「や」をつけて切り、句末は名詞で結ぶ

動詞の終止形・連体形＋「や」

名詞

桃咲くや

形見分けせし手品帽

凡茶

①で学んだ形の上五の名詞を、動詞の終止形または連体形に変えても、耳に心地よく響く佳句ができます。以下の名句がその例です。

秋たつや川瀬にまじる風の音 飯田蛇笏 『山廬集』所収

身に入むやつまみ菜沈むよべの汁 野村喜舟 『小石川』所収

足袋つぐやノラともならず教師妻 杉田久女 『杉田久女句集』所収

雁啼くやひとつ机に兄いもと 安住敦 『安住敦集』所収

しぐるるや駅に西口東口 安住敦 『安住敦集』所収

例示した俳句のうち、「身に入むや」の句は動詞の終止形、「しぐるるや」の句は動詞の連体形に切字の「や」がついています。そのほかの句は、終止形と連体形が同じ形をしている四段活用の動詞に切字の「や」がついています。

また、動詞と比べると、ずっと少なくなるのですが、上五の四文字の形容詞の終止形に「や」をつけて切り、座五の名詞で締めくくった名句もあります。類型として、是非頭に入れてください。

のどけしや湊の昼の生ざかな 荷兮 『あら野』所収

なつかしや帰省の馬車に山の蝶 水原秋櫻子 『葛飾』所収

暗誦

俳句上達のコツは優れた句を覚え、その形を使いこなせるようにすることです。前出の名句を、季語と作者を手掛かりに書き出してみましよう。思い出せない場合は、前に戻り読みなおして下さい。

(ア) 季語 秋たつ 作者 飯田蛇笏

や

(イ) 季語 身に入む 作者 野村喜舟

や

(ウ) 季語 足袋 作者 杉田久女

や

(エ) 季語 雁 作者 安住敦

や

(オ) 季語 しぐれ 作者 安住敦

や

◎類型

(カ) 季語 のどけし 作者 荷兮

や

(キ) 季語 帰省 作者 水原秋櫻子

や

暗誦 解答

- (ア) 秋たつや川瀬にまじる風の音 (飯田蛇笏)
- (イ) 身に入むやつまみ菜沈むよべの汁 (野村喜舟)
- (ウ) 足袋つぐやノラともならず教師妻 (杉田久女)
- (エ) 雁啼くやひとつ机に兄いもと (安住敦)
- (オ) しぐるるや駅に西口東口 (安住敦)
- (カ) のどけしや湊の昼の生ざかな (荷兮)
- (キ) なつかしや帰省の馬車に山の蝶 (水原秋櫻子)

練習

上五の動詞の連体形に「や」をつけて切り、句末は名詞で結ぶ形の俳句を、後述の情景に実際に臨んでいる気分になって詠んで下さい。

【注】解答例の句は、凡茶(筆者)が既に発表したものです。よって、ここで読者様が詠んだ句を、自分の句として句会、結社誌等で発表したり、俳句賞の公募に応募したりすることはしないで下さい。

情景

図書室でいつも利用する露和辞典を探してみるのだが、書棚には見当たらない。どうやら他の誰かが持ち出しているようだ。仕方なく古いものを使ってみると、旧(ふる)い活字で書かれており、いつもと勝手が違う。ふと窓を見ると、雨が霰(みぞれ)に変わっている。

や

練習 解答例

霰るるや旧き活字の露和辞典 (凡茶)